

令和3年6月30日

第28回「大学入試のあり方に関する検討会議」における意見

日本私立中学高等学校連合会 会長 吉田 晋

(1) 前回会議において、「英語の資格・検定試験等は、個々の学びとしての英語力を測るものではあるかもしれないが、高等学校での英語の学習状況を測るためのものではない。そのことを踏まえた記述とすべき」といった趣旨のご意見があった。この点については、誤解があると思われるので、考えを述べておく。

第一に、「英語の資格・検定試験等は、高等学校での学習状況を測るために開発された試験ではない」ということはその通りであるが、そのことは各大学の個別試験についても同様である。各大学の個別試験における英語問題は、高等学校での学習状況を測るために作られるものではなく、各大学が各々のアドミッションポリシーに基づき必要とする能力・適性等を把握するために作成されるものである。資格・検定試験だけを取りあげて、高等学校における学習の評価とイコールではないことを殊更に強調するのは極めて拙速であり、ミスリーディングであると言わざるを得ない。(そもそも高等学校の英語教育の実態は千差万別であり、それらの多様な教育課程の内容とイコールになる外部の試験が存在するはずもない。)

第二に、昭和35年に告示された高等学校学習指導要領以降、外国語科の目

標の中には、常に、聞くこと・読むこと・話すこと・書くことに関する力を育成することが掲げられており、特に平成30年に改訂された新学習指導要領では、小・中・高等学校を通して、聞くこと・読むこと・話すこと・書くことを統合した言語活動を重視している。また、授業を実際のコミュニケーションの場面にする観点から「英語で授業を行う」とされてから10年以上が経過しており、特に中学・高等学校の英語教育関係者は授業改善に日々努力を重ねている。これらのことを踏まえれば、事実上、圧倒的に「読むこと」に偏っている各大学の個別試験と、スピーキング能力やライティング能力も含めて測定しようとする資格・検定試験のいずれが、高等学校の学習指導要領が求める教育活動と親和性があるのかは明らかであり、この点から目を背けるべきではない。

第三に、閣議決定である第3期の教育振興基本計画において、中学校卒業段階でCEFRのA1レベル（※英検3級）相当以上、高等学校卒業段階でA2レベル（※英検準2級）相当以上を達成した中高生の割合をそれぞれ5割以上にするという目標を設定しており、その実現状況を把握するための実態調査が継続的に実施されている。生徒の立場からすれば、自らの総合的な英語力の習熟度を客観的に確認し、更なる学習へのモチベーションを高める上でも資格・検定試験の意義は極めて大きく、現に広く活用されている。また、多くの高等学校の立場からしても、国がCEFRを目標に掲げて各学校の取組を促しつつ、統一的なパフォーマンステストの導入を行っていない以上、正確な英語力の到達度の把握方法は資格・検定試験であるという現実を無視し

てはならない。（とはいえ、資格・検定試験を日常的に受検できるわけではないため、日々のパフォーマンステストは重要であり、初等中等教育局においては、提言案28ページのように質の地域間・学校間の差を解消するための効果的な方策を早急に講じていただきたい。）

(2) 入試改革をめぐる今般の経緯により共通テストの枠組での資格・検定試験の活用は困難となり、残念ながら我が国の教育のグローバル化は諸外国に更に後れを取る事となった。

これ以上の停滞は許されない。国として各大学の個別試験における総合的な英語力の評価を推進するとしても、それが実際に多くの大学の入学者選抜や大学入学後の教育課程において実現されるためには、物心両面の支援策が必要である。そのためにも、提言案の30ページにある社会が必要としている英語力の水準の調査・可視化は極めて重要な意味を持ち、日々努力している初等中等教育の英語教育関係者にとっても大きな励みになるものと思われる。文部科学省において、本提言の取りまとめ後、間髪を入れずにこの調査を実施し、その結果を早急に提示いただくよう強く求めたい。

以上